

難治性スキルス胃癌の 病態と治療

胃癌は、診断技術や治療法の発展により予後が改善されてきました。しかし一方、胃癌のおよそ1割を占めるスキルス胃癌は、依然、難治性で極めて予後不良です。スキルス胃癌の病態解明や新規治療法開発が重要課題となっています。本講演では、外科手術材料を用いた30年間のスキルス胃癌研究の経緯と、明らかになってきた病態や治療戦略についてお話しします。

八代 正和 先生

大阪市立大学大学院医学研究科
癌分子病態制御学 腫瘍外科学
准教授



ご略歴

1988年 大阪市立大学 医学部 卒業 同附属病院 研修医
1990年 大阪市立住吉市民病院 研究医
1995年 大阪市立大学 大学院医学研究科外科系専攻外科学 修了
1998年 大阪市立大学大学院医学研究科 教員（現職）

所属学会

米国癌学会, 日本乳癌学会, 日本外科学会,
日本大腸肛門病学会, 日本消化器内視鏡学会,
日本消化器外科学会, 日本消化器病学会,
日本消化器癌発生学会, 日本癌学会, 日本胃癌学会,
遺伝性腫瘍学会

担当 金沢医科大学大学院医学研究科腫瘍内科学 安本和生教授

共催 北信がんプロ

問い合わせ先 金沢医科大学教学課（大学院医学研究科担当） d-gakuin@kanazawa-med.ac.jp

※ がんプロe-learning科目の演習対象です。

感染症対策として、マスク着用のうえ、ご参加願います。